

7. メタボリック症候群が日米の循環器疾患死亡リスクに及ぼす影響

研究協力者 Longjian Liu (ドレクセル大学公衆衛生大学院 准教授)
研究代表者 三浦 克之 (滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 教授)
研究分担者 藤吉 朗 (滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 准教授)
研究分担者 門田 文 (滋賀医科大学アジア疫学研究センター 特任准教授)
研究協力者 宮川 尚子 (滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 客員助教)
研究分担者 中村 保幸 (龍谷大学農学部食品栄養学科 教授)
研究分担者 大久保孝義 (帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講座 教授)
研究分担者 岡山 明 (生活習慣病予防研究センター 代表)
研究分担者 岡村 智教 (慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学 教授)
研究分担者 上島 弘嗣 (滋賀医科大学アジア疫学研究センター 特任教授)

背景・目的: メタボリック症候群(MS)の有病率および循環器疾患(CVD)死亡は、日本に比べて米国の方が高い。しかし両国におけるMS有病率の差がどれほどCVD死亡の差を説明するかに関しては不明である。

本研究の目的は、MSがCVD過剰死亡に及ぼす影響を米国と日本とで比較することである。

方法: 第三次《米》国民健康栄養調査(NHANES III 対象者数 12,561人)およびNIPPON DATA (対象者数 7453人)とのデータを解析した。

MSは以下の5項目のうち3つ以上を満たすものと定義した: 肥満、血圧高値、HDL-コレステロール低値、HbA1c(糖化ヘモグロビン)高値、中性脂肪高値。

結果: 米国では、追跡期間13.8年(中央値)のうちに1683例のCVD死亡(11.75例/1000人年)が、日本では、追跡期間15年(中央値)のうちに369例のCVD死亡(3.56例/1000人年)が観察された。MSの年齢調整有病率は米国で26.7%、日本で19.3%であった。MSの5項目のうちCVD死亡の有意な危険因子であったのは、米国では肥満、血圧高値、中性脂肪高値、HbA1c高値、日本では血圧高値、HbA1c高値であった。日本に比べた場合の米国における循環器疾患過剰死亡のうち13.4%がMSにより、また44%がMSおよびベースラインにおけるCVD既往にて説明できた。

結論: 米国のCVD死亡リスクが日本より高い点に関して、MSとベースラインのCVD既往により(ある程度)説明できることが本研究により初めて定量的に示された。